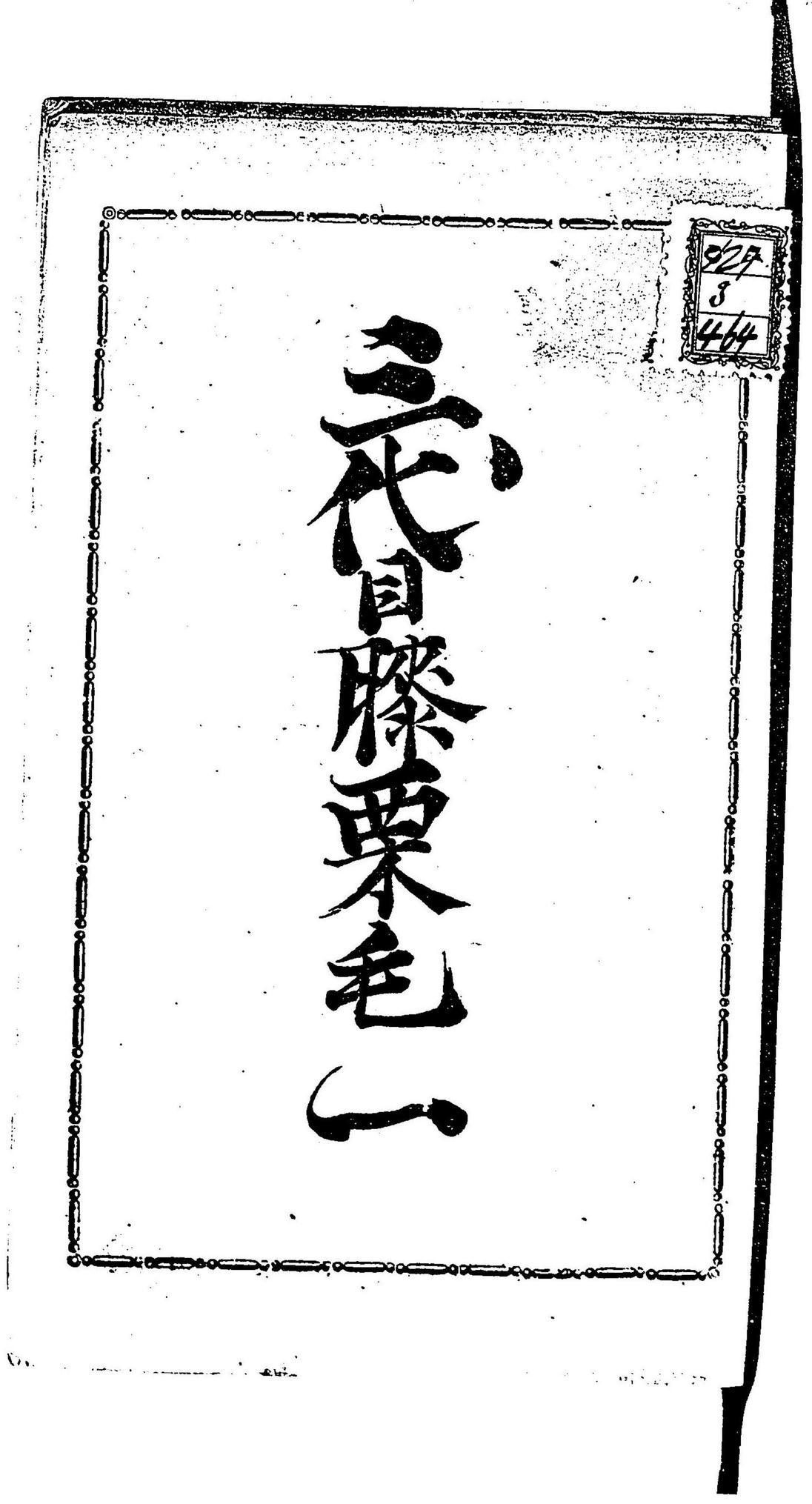

927
8
464

091732-000-4

特67-728

三代目膝栗毛 巻之1

村上 孝四郎/著

M16

DBO-0206

代目滕栗毛序

明治十五年三月一日

先代の馬鹿を再萌し汝彌十磯郎を鹿島立とし羇路に赴んとす貴長の光陰を何と心得るや假令自由の權有るよもせよ世に遊民となりて寧織ても益民となれ殊更天命も半分過所謂人間生涯五十年除夜二十有五年時々若爲午時睡僅是十有二年殘年る正味は最早六年三が月よ過ぎかへらんか皈んか我東京の稼ぎ社會へ汝彌十磯郎先代の滑稽晒落を忘るなかれ今日暮れば明日あり商法資本を食

ふの時態也ふさつ取なれバ遊ぶべし人間五十年僅の生涯にして再び見ること能はざる此浮世浮れる瓢覃に怪我なく沈む酒に害有りいざ〳〵たちてきませよ

旅衣茲に於て彌十儀郎前者の説を捨て後者の説を採り人力車にすべり駿河路へ足を伸し不二を枕に田子の浦を白眼春は唯山の笑ふと思ひしに海を笑ふや帆々々々々浮れ出さる三番叟斯の如し

明治十六年六月

編者識

三代目膝栗毛卷之一

村上孝四郎述

十編舍一丸先生の著したる膝栗毛とちめん屋彌次郎兵衛が三代の后胤ゑ無目的彌十といへるもの有舊に依て東京府神田區某町某番地に住居して相變ず逼迫の遊民也ま

た喜多八の子孫に今最磯郎と云ふ生死もの有彌十が宅に同居して食客たり其曾祖父彌次郎兵衛喜多八が生前の時と換りて彌十磯郎等い殺に畏き大君の御代の民たれバ文明開化の進むゑ從て奬習を廢し眞實の人々となるべきゑ瓜の蔓にい茄もならず蛙の兒ハ亦かいる滑稽を祖業と心得て氣の輕きこと瓢然とし口の重きこと石然とし廻らなゑ古で滑稽の口きき、紙幣のなひ癖に美味を好ゑ身に沁まとふ着物ハなくとも酒の爲にハ藏かゝりてもこれも人稱といふ社會ハ五大洲中ゑも又ない別世界なれバ究理

家や道德論にハ頓と合ない譯でひと下子とづれたドヽ一「僅か此世は生ながらへて
辛抱強ひもやがのうち　彌十　磯公此ドヽ一の通りた今の世の中が理屈詰めたといつ
てが正がそゝもいがない譯で此好時候に出會ながら斯空然して居も智恵のねェ咄た
ちつと他方かへ出掛やうぢやアねェか　磯郎　そうさそれぢやアこふと櫻ハまた早ー
上野向島とも出られないから常も賑な淺草へでも行とえやうか　彌十　足下つまらな
いとを云せ僕等が出浮と云れ一寸でも紙帶の百と百五寸ハ革函の庭へ入て其實の
なくなるまでハ旅で遊ぶといふ洒落さ　磯郎　米價もねェしせよ威張も惜アけれじそれ
ぢやア洋行でもえやうと云のか　彌十　何ろんなに大きくでられちやア困るよ御互の
先祖ハ東海道から京大坂讃州金刀比羅安藝の宮島岩國の錦帶橋位で四國順禮ホイ西
國遊覽位た譯だが其復徹を踏で東海道を經伊勢參宮西京大坂を一覽し事平に參詣

して夫より船路を西南ヨ向ひ薩摩征伐と出かけやうかそこで道中の滑稽を筆記する
よハ向ふの言葉を其儘記書と國なまりでわからないことが多つて看客の煩よもなり
また國々の土音を取ハ至て面倒だし十編舍翁ですら國土音ハ間違が多てんけないか
ら矢張東京言葉とえやう　磯郎　先それで道中の段取ハ極りと云譯だが極らないのハ
肝必要の旅費だ彌十さんそれハどふする積りたへ　彌十　八重垣姫氣取で身ぶりをし
ヲヽそれとそ安ことその旅費さへ有たれも　磯郎　濡衣氣取にてイヤサそれもこつち
よ望が有一個ならず二名づれ永の旅路を赴くに五六圓の端金でハ迚も宿志ハ果され
まひ私が所望旅用と云ハ七八十の其金をどこかで盗でもらひたひ　彌十　八重垣姫何
といやる大數な其金を盗出せと云やるからハあたが誠の勝頼イヤ泥的さん　磯郎
聲が高ひ微塵聞のなひ磯郎泥的呼ヒ隣家の手前外聞が惡ひモウ止晒落ぢやアねェ其

旅費いどうとるのだへ　彌十　實ハ僕もそれよ困却て居るのさ　眞實よなり双手を組で暫時考へ良策を出せよ　体にて足下や僕が体裁でハ金を借る先方もねエが孔明もだし走ると云奇〻妙〻の謀略を熟考た其策ハ斯さ　中言ながふ編者預辨ト　彌十が彌十兼て承知し居る故此周旋を首尾能爲たれバ大金の事故周旋料の百圓位ハ手に入る事ゑれバ其事由を磯郎よ語譯て兩個百方配意すると雖兩個の働きゑてハ調ハず止を得ず其道の者へ相談したたれバ素抵當ハ確乎なり早速調ひけれども周旋料ハ過半其者よ得られ僅よ四十圓計の配分を得それを懷とし住まれたる借家ハ大家へ歸足留主中の約束にてある獨身を仕込せ旅裝を整へ大坂より先よ船路の遙なるを思ひ彌十遣て東京發足ハ兼ての見込通り東海道と定め新橋のステーションを指出發たりなんと磯公足下の曾祖父や僕が曾祖父が旅立の時節とハ違て開化世ハ大變ぢやアねエか疲勞馬や驛輿で足休めをしやうと云處を生ず初幕が滊車それから二段目三段目と段々よ馬車だの人力車だの大切ハ蒸氣船と云譯たが到に驚くぢやアねエか今から

十年も後よハまだどんなよ便利が出來るのもしれねエせ　磯郎　何十年ハ俟ちアしねエ僕が今度歸てくると東京から大坂へ一瞬目の間に人の運送をする奇巧を設て金儲をする積りさ東京から大坂へ届く丈の長板を富士の絶頂へすけて双方の端へ綱を付て東京から大坂へ行く人の有時ハ東京の方の綱を引と板の端が東京の市中へかたゞくそこで人を十分載込で電信で合圖をすると大坂の方の綱を引東京で載た人ハ蜻蛉返しに大坂へすべり込むと云仕掛さ　彌十　又馬鹿をいふせ人が聞と亂心かと思ハア夫滊車の札の賣出だ二個分をとやく買てきな　磯郎　ヲット承知の助貳枚の滊車札を買ひ乘移れバフルイトルノ音と共に滊車ハ出て行煙ハ殘る　磯郎　不取敢積く起すかゝもなけれハ殘るともはづみのぬけたけぶりなりけり

斯打興ドつゝ數輩の乘客と供よ明治十五年三月一日午前八時十五分の滊車にて新橋

を發し品川大森川崎鶴見のステーションを過神奈川のステーションにて彌十磯郎は
滝車を下臨ずべきの處乘合の客と例の晒落噺に現を抜し下車を忘れて神奈川をも乘
過横濱のステーションよ果たり茲よ於て始て心付れども今更爲方もなく彌十磯郎
互よ不足を云ながら五錢宛の增賃を拂ひ横濱のステーションを出と蒸氣問屋の客引
譯集彌十磯郎に向ひ蒸氣船よりも猶巧みに口車に載んとす兩個は兼て臨路の覺悟な
れば之をふり拂ひあたりの店よ入 下女 を早く入ッさやいと云て茶を汲に行 磯郎
彌十さん悲嘆東京とは違て濱の女は一風違つてまたをつよ好ようだねエ 彌
十 さや感溺を始たアそんな事處ぢやアねエ滝車を乘過て茲エ來たとすれば これから
の進軍はどうやらかそよ 磯郎 そんさこゝ迄來たら鎌倉江の島見物としていざふ
ね 彌十 成程そいつは奇妙それと極めてまた腹は滿ッから一杯やらかろうか 磯郎

君の尊命如何でか拒み奉るべき 彌十 コウ姉エさん有は何だエ 下女 ハイ鰹と蛤が
有ます 彌十 それぢやア鰹の差身に蛤の吸物で酒を早くおくんなさい 下女 畏まり
ました勝手よ行き程なく酒肴を持來り酌にかゝる 彌十 下女に向ひ長女さんをめへ
當港かエ 下女 イヽエ私は東海道の大磯でございヤス 彌十 それぢやア宮代屋伊三郎
さんの近隣かエ 下女 違ひヤス 彌十 山本屋秀公の近所か 下女 違ひます 彌十 それ
ぢやア百足屋兼公の近傍か 下女 その方ぢやア有ません貴客は大そふお委しうござ
いますエ 彌十 さふさ東海道は道中記でイヤ度〻の道中で能知て居るのさ 磯郎 一
新講や真成講の宿屋位は道中するものは誰でも知て居るが僕等はそんな譯ぢやアね
エ大磯にやア馴染の女が有のさ 下女 ヲヤ左樣でございますかそれぢやア君鶴か若
江か小蝶か此二三の全盛ものでございましやう 磯郎 何そんな處ぢやアねエ上等さ

下女　それぢやァ誰で有ましやうねエ　礒郎　お前エなんぞァ若から知ねエよ大礒のお虎と云て大へんな全盛ものそれが此男の馴染彌十を指少將といふ頗る別品ハ僕のさそこで此男と僕ハ兄弟分と云譯だハヽアト笑へバ　下女　確説かと思つて聞て居ましたらおなぶんなさつさんでこざいますか覺へて入つきやい　彌十　此男ハ正氣のないので何もこんな事を云て居のさ時にお前ハ僕が云つた三軒の近隣でねエと云なさるが容姿を見るよ平民の孃さんとハ見へねエ小田原あたりのを士族だらふ　下女　そんな上等ものぢやァ有ません　彌十　そんなら何だ　礒郎　身の上咄も又一興ヲヽ所望だ所望だ　彌十　ぢやうだんいわないで正説を咄しなせい下女年の行ない處ら彌十が嘲弄を眞實に受て　下女　それぢやァ云ますがね弟親ハはやくなくなりまして私と姉兩員よ母と四個で暮して居ましたが女計で活計が立ないので姉ふたりを大礒に

残し母と私と二女で此濱に親類の有を便て舊年引越し間もなくお母が病て足も無なりまして私も其時ハ十方に暮て何程よ悲く有ましさものか大礒に歸た處が爲方が有ませんから親戚の世話で此宅へ雇人に來ましたのでございますヲヽ私としたことがお馴染でもない貴客へこんな面白もないお咄をしてお耻かしやおはなしよ身が入てお銚子が冷ました暖かなと換て參ましやうと立て行再び來ると礒郎餘り哀れな咄で僕等も茫然ぢ來たそこで話を切替ようと大礒よ居さる二婦さんハおめエの姉さんだから嘸美麗ひだらう良人ハどうだへ　下女　ハイまだ夫ハ迎ませずそして醜婦でございますよそれだがね私よりハ兩婦共上等で有りますよ　彌十　僕等ハ從是鎌倉廻りをして小田原迄商法用で行のさ斯な話を聞も何かの因緣と云ものでも正か人の事共思これなひやうだが何か姉さんの處へ書簡でも遣なされバ届て進上やしやう　下女　難有御座

ますが飛文ハ郵便で度〳〵取遣もして居ますれバよふございます外に送たひものがございますがね正か貴客へ御願ひ申す譯よも參ませず困難居ますよ彌十それぢやァ見ず知ずの僕等だよ依て疑惑てをいでのか下女何左樣ぢやァ有ませんがね送ものが餘り異なので御無禮とぞんトますよ彌十何そんなことに頓着ハねェ品ハ何だか云てみなせい下女少し耻たる体よて顔を赤め實ハ前時の御話續きの事で有ますがねあの何でございますよと云て口籠る彌十急てそんなに耻かしがるとアねェ云てみなせェ下女それぢやァ云ますがねれ笑ぢやァいけませんよあのね函に入て能く仕舞てハ有ますが實ハお母の遺骨でございますものヲ彌十遺骸と聞て愕然すれば礒郎始終を聞すまし胸に一物有バ何撞ふことアねェ出なさの届て上やう遺骸だと云て仕舞て有バ譯アねェ嫌なものだと云て辭る時にやァ人の深情と云ものぢやァねェ此言葉よ勵さ

れて彌十氣を取直しさふよ礒公の云ふ通りだ姉さんとゞけて進やう明日ハ大丈夫向へ手渡といふ譯さ下女お言葉に甘へ失敬でございますがそれぢやァ御願ひ申ますと頓て遺骨の包を取來るを見れバ名宛も兼て委しく認め有バ礒郎これを請取猶言傳をも委細に聞く彌十姉さんお暇と致やしやう勘定を頼みます下女ハイハイと亭主を呼亭主來りて目算を爲亭主それぢやァ卅錢頂きましやう彌十勘定を濟し立出んとする處へ車夫兩三員來り車夫貴客お供ハ出來ませんかねと種々進るにつけ二輛の車を鎌倉までの約束よて雇ひ乘出す亭主下女有がとう左樣なら御靜に車夫シテユイナァハイ頼みます頼むせ〳〵と街中の人を攘ひ馳て行横濱より鎌倉への道ハ山坂よして折節雨降いたしけれバ彌十

降る雨よひく車夫のなやむかなかまくら山の道そけはしき

扨も彌十礒郎を載たる車ハ追々進んで鎌倉近くなると向から戻りの空車を曳駄哥「西と南へ引分られて廻り近江の伊勢下向彌十礒郎を載たる車夫ヨヽ寅ア味ェことをしやアがつたね鼻歌ア置アがれ　空車　苦辛ア見ろ雨のふるのに遽々と出かけて鎌倉の地獄へでも入りやアがれ車夫の挨拶曳違の捨言葉彌十礒郎を乗たる車ハ程なく鎌倉の町端に懸る　車夫　鎌倉の町ア區々よなつて其所ゞ立場とも定まりハ有ませず雨ハふるし貴客茲で御免なせい　彌十　さふかそれぢやア下やう足下雨ハふるー早いが此で泊りやうか　礒郎　ヨカ〳〵アナタワタシ泊ヨロシ車カヘルヨロシ夷人言葉の真似をする車夫ハ笑ひながら賃錢を請取車を片脇へ曳行　旅亭の若者　お早でございます御兩君でございますかサア〳〵此方へ入しやいと荷物を持て奥の坐敷へ案内する下女　茶烟草盆と運び今に御湯の御案内も致ます御ゆつくりとゝいふて行　礒郎　車に

居ハ互に話も出來なかつたが足下横濱で預持た遺骨ハどんな積りで誤負たんだェ　彌十　足下ハどう思つてとゞかつたんだ　礒郎　横濱の敵よりも大礒の姉ハ上物だと聞ちやア捨置れないから梯の策の爲よ請負たんだ色男の魂膽ハ違たものさ　彌十　何讓足下　礒郎　如才ハねェのう　彌十　勿論　礒郎　甘く策が當れバ五六日ハ大礒で居續とーやうか　彌十　亦惑溺を云せそんなことア向の應方ひとつで臨機應變さそれにしても今から條約をして置なけりやアならないことが有大礒の女の年齢を聞なかつたが一生の誤り殘念だ條約といふバ外ぢやねアェ足下姉の方と極るか　礒郎　なせ〳〵お前の方が年長だせさうしてみるとおめェが姉僕が妹と云が至當ぢやアねェか　彌十　此道斗りハさふ云規則よハいかないそこで鬮よ仕やう　礒郎　それも公平で好ろうやかて鬮取にしたれば彌十よ妹礒郎よ姉の鬮が當り礒郎不平なれども是非な

くそれよ居合さて遺骨も江の嶋まで彌十の持江の嶋より藤澤まで礒郎の持藤澤より平塚まで彌十平塚より大礒まで礒郎の持と驛次よ定めたり　彌十礒郎の生質曾祖父の遺傳よて殊の外なる淫物也醜男子のくせに素人を懸念矢錯あつて耻を蒙ごと度々なり横濱の下女ハ頗る才子よして兩愚の眼付をみて取大礒の姉を餌とーむ賃よて彼志なを屆させる策なり其實ハ母の遺骨よあらねども一面識瓢客ゆへ其志なを奪れんことを恐れ謀て遺骨と僞しものなり　宿女帖簿と硯を携來り　下女　御國と御名義とを願ひますそして離殿か湯に入しやい　彌十　ヲット承知だ礒公宿簿を頼やすねエさん風呂ハをつちだへ　下女　ハイ其行當りを右へ入つしやい礒郎ハ帖簿を手よ取東京府神田區某町某番地無目的彌十三十二年今最礒郎二十五年とーるして下女よ渡しねエさんおめエの類に墨がくついているせ　下女　ヲヤさふでございますかと顔よ袖を覆　礒郎　それぢやア墨ハ落アしねエこつちへ寄な消して進やうと手拭を持

てかゝる　下女　有がとうと云て顔の袖を除る　礒郎　油斷を見極し首玉へ抱きつく　下女　アレサ御免よと聲を叫るその處へ彌十湯より歸り來るそれを幸よ下女ハ礒郎の手を振放し顔を赤め立て行　彌十　馬鹿をするよハ困るのふ早く湯にへエてきなせい　礒郎　肝忍の處で邪魔が入て本意を遂そこなつた殘念至極ドレ湯よ行やしやうと云て立頓て湯より歸れバ　下女　晩飯を供注文の酒を添て來り下女酌よかゝる　彌十盃を　執て酒を請ながら下女に向ひねエさん前時にハ困たろふ此男ハ少や色氣逸と云ので斯連だつて居てもげいぶんが忍るくつて閉口さ　下女　チャさふでございやすかチ私ハ惡晒落な御方だと思つていましたよ　礒郎　少しく强味そんなことを眞實よ請られちやア恐れるねアさん和睦しよ酌でお呉なせい　下女　笑ひながら酌をする　礒郎　菓子椀の蓋を取中を見れバ京菜よ椎茸車海老也その海老を挾み擧て下女に云

僕ゞ心底ハ此海老の通り一度情交よなつたら腰ノ折さでといふ哲言たさう聞てみる
とまんざら悪アあるぬエがチ　下女私ハ海老の樣ヨ飛る男ハ御免でございまそよ聊
か意地を持　彌十　笑坪に入奇妙〳〵とそやし揚興に乗ト て指つ押つ呑程に酒も盡し飯
も食ひ仕舞へバ下女膳を引く按摩ハイ御免なせい出入の按摩でございます　礒郎　兩個の
客ヨ一個の按摩ぢやア困るぬエ　彌十　さんきなせい一手いかないか　彌十　ヲットきさホ
ヒホヒホヒホヒきたホヒ　相互チ　ホヒうさたホヒ　蓬ねエのう　礒郎　仕方がねエ　僕が勝たん
だから按摩さんサアやつてお呉なせい　按摩ハイ〳〵　畏まりましたトもみまかゝる　安
摩あなたがたハ大そふ御氣が輕いので御樂が深ふございましやう　礒郎　さうさ氣が
輕くつて口が輕くつて足が輕くつて最少のことで輕氣船と同行ー空中を遊歴すること
とが出來ないのさ　安摩　なせでございますエ　礒郎　されバふところが重い斗　ことさ安

摩　それぢやア　梅川忠兵衛とお出掛ハどうでございましやう　礒郎　それハ　安摩　翁ひ果し
て貳方殘るでございますらア　礒郎　鎌倉相應晒落だね　彌十　いや中々妙た鎌倉にやア置か
れぬエさう頓智が有ると　礒郎　なせ　彌十　左バ敵ヘ内應の恐が有て賴朝や時政の妬みが
有だろう　礒郎　イヤハヤこれも時勢ヨ待合ない究理説だト　互に晒落を云つゝ　彌十　と
採仕舞按摩も歸る夜も更兩個床に入て白川夜船の高鼾も息の通路咽豆にひつ懸て眠
を覺せバとやくたかけの聲ちげり三月二日と明渡れバ兩士ハ起出顏を洗ひ朝飯をも
終ひ宿價を投し出行とす　亭主　鎌倉御一覽でございますれバ御案内を付まちやう　彌十
さうさ賴むも好がそれでハ話が多端て筆者が困るで有ろうまづ止うハイ御せ話でも
りやした　亭主　御機嫌能を諍にと定りの挨拶　彌十　礒郎ハ名にしおふ鶴ゞ岡の八幡宮ヨ
まふでゝ　源　實朝々臣の歌に

千とせふる鶴が岡への柳原青さにけりなる春を去るへに

此うたにて枯なんとしたる柳の生かへりたると聞つたへて礒郎

生さかへる柳ハ神のみ恵と賀朝ぬしのうたのいさをそ

彌十もをとらぬ

鶴が岡やしたの神の宮柱千世へて猶もうるはしきかな

大塔の宮を祭れる鎌倉の神社にまふで、彌十

明らけき御代の祭りを請ませい神の怒りも稍宥むらん

礒郎をとらず

まつろはぬ人の言擧ぬみよして仰ハ獨りかまくらの宮

圓覺寺に參りて北條貞時の建立と聞て彌十

庭もせに苔むしなから貞時のぬしのうたみを殘す古寺

建長寺ゑ參りて北條時頼の建立と聞て礒郎

ものさひてゆかしく見ゆる此寺ハ時頼主の筐なりけり

由井が濱の北にあたり道のべゑ芭蕉の句を彫たる有り

なつ草やつはものどものゆめの跡

これを見て彌十

言の葉に數すへなくも盡したり實ゑ兵のゆめの跡なる

濱ゑ出でかしめといへる海草を海士の取をみて礒郎

打寄る浪間を海士のくゝりつゝ由井が濱へゑ藻とる也

奈良の大佛ゑ斯有んと思ふばかりの銅佛雨露にぬれつゝ坐したるをこればこれなん

長谷寺と聞く彌十

大和路をこゝよ移して銅金の佛も長谷の寺もありけり

七里が濱といふよ出磯の真砂をみれゝ一面の鉄砂なり此濱の名を七里が濱と云ゝ六丁一里よしていへる名なり三十六丁の一里よ直す時ゝ一里と六丁なりけり磯邸

鎌倉やこの長濱のいそみれゝ皆黒かねの真さこなり兎

稲村崎を見遣新田義貞の故事を思ひ出して彌十

遠干とゝ思ひ謀りて稲村よ殘そいさをの名こそ高けれ

それより彌十磯郎ゝ江の島よ渡り三つの祠をふし拜み岩本の不二見樓よ登り酒呑飯くらひさま〳〵の風落滑稽有又島の詠め名所の言擧有といへども煩敷けれバ略く

江の島辨天と稱へしゝ佛者の作意にて其實ゝ安藝の宮島嚴島大明神の分靈なれば

一新以來名稱を改て嚴島社といふまた江の島ゝ備に歩渡るべき道あれバ船の助けよゝ及バざりけり彌十磯郎互によめる

江の嶋やいつくゝ有と岩本の富士見の庵を人に見ゝや

江の嶋ゆみつの社ゝ殊更にながめも廣し沖つ志らなみ

扨て江の嶋を立出歩みながら　彌十　鎌倉江の嶋ゝ風流めかして閑靜に樂みをしたね

エ　磯郎　さうさ時々よやァ眞實にならなひどいかねエ譯さそれだが音に聞へた鎌倉

だが見て愕然ぢやァねエかまた頼朝も名高姦雄だが鎌倉を見ちやァ失生等の胸膽も

てエげい知たものだ氣の小哉やつさ　彌十　さうゝいかねエ域内が幾等廣か云て狹か

云てそれに依て住居だ人の位置ゝ極られやァしねエ大海よでも鰯や海老雜兒も居し

鎌倉ゝ古ひ處だから見るものが物さびて隨分妙だぜまた七里が濱から江の島ゝど

ふだ此絶景ハ東京にも有ァしねェ時ょ話に味が人て肝心の事を忘れて大そふ損をしだ江の島から藤澤までハ此骨ハ足下の受前ぢやァねェか僕がだまつて居た處が足下が何とか云なくつちやァ義理が濟ない譯だし第一條約に背くぢやァねェか横着頑惰男だと怨言て包を礒郎ょ投與す礒郎ハ笑ひながら義理や條約も憫らァそのもとの事起を人ょ聞せたら腹を抱るであろうと云つゝ包を請取て行程なく龍の口行逢の川に近づき日遼の故事を思ひ出して礒郎

龍の口えゝの法師の膽をしも寒からまめしゆき逢の川

彼是して藤澤驛の棒鼻にかゝると車夫くるまを進ひ　彌十　大礒までで迚ーで幾らだ車夫安くめェまやしう淋獨で三十五錢宛ください　彌十　そんな價格ぢやァ乘れなひよと行き過る　車夫付て來り幾等の云てください　礒郎　二個で三十錢ゝら來やう　車夫　后後ゝ

ら大礒までそんな價格ハ有ませなァ正直を云てください　礒郎　十五錢宛の過ハ一錢も出ないよ　車夫　そんな價格で行ものァねェ馬鹿げ切ていらァ　礒郎　何馬鹿だ手めェ大膽奴だ　車夫　何ダふてェ藤から行れねェと云つさんだ　礒郎　それならハうれねェと云ゝことの足ゝ譯だ馬鹿ゝァなせ云ゝ　車夫　とんちき野郎耳ハさけいくついて居るのだ馬鹿げ切ていると云ゝのハおいられ方のことで手前をいつ馬鹿だと云たべら棒め　礒郎　何だ鈍物野郎べら棒だ失敬仰る雜言捨置れないと彌十ハ眼くばせして強味でかゝる彌十も傍觀居る譯にもいゝないから一強味せんと思へども向ふハ荒くれ手合殊に大勢と云處に恐れ尻込して居る　車夫　此野郎ハ強味ァあがるせぶんのめして仕舞と立かゝる　礒郎　強味でハゝさものゝこうなつちやァ叶ぬと通だすを車夫とつらゝへて既にこうよとゝへし處へ靴音高く査公來かゝり双方を訊論し漸く危急の場を逃れて礒郎ハ

彌十に不足のだら〳〵をいふ種々あれどもそれ因礒郎の粗忽より出でさるものなれば

彌十

いさかひの元ハ車の廻ぬ故内轄くせつの馬鹿ハ止べー

とてハ大笑ひとなりて彌十礒郎藤澤驛を過ぎたる處にて大礒のかへり車より出逢ども前時より懲て車價をも強て直切す車夫の方から歸りといふ譯で車價を負け一人前廿四錢に打出しそれより熟談ひ平塚の驛をも乘過大礒近くなりけるとき　車夫　大礒のお泊でございましやう　彌十　さうさ　車夫　宿ハどけい入しやるヲ　彌十　其事さなんと礒公ぞふしたものだ　礒郎　何よしても一應宿へ着て其上のことよしやうぢやアねエか　彌十　如何樣それぢやア車公宮代屋へ遣てください　車夫　畏まりましたヲイ岩蔵急ないか礒郎を乘せたる車ヲットきたり付いて來よと兩車一層駿足となり馳行く午

后の歸車ハ一際急ぐ情のあるものにて四時と思しきころ宮代屋へ着到す宮代屋亭主若者口を揃へてお早入しやい今日ハ好天氣で御道中もお勇敢んしやいましやうヲイ二番の坐敷へ御案内車屋さん御苦勞と云て車夫へ酒代の心付有と知るべ〻彌十礒郎ハ導につれて二番と云坐敷へ通る東海道にて一新講眞成講の宿屋ハ大概其宿に屈指の富家此業を營むいづれも宅の廣きのみならず兩側の通りたる坐敷も客二間に適當の間まて六疊に床袋棚有床に掛たる軸も大黒さんに米俵といふ画にあらず書湖の米點山水位に額ハ某書記官の書と云体裁さらさの坐蒲團宣德の火鉢時代の鈍瓶京燒のきびす茶碗錫の茶入に喜撰位の茶を入文人彫の茶盆菓子器ハ干菓子を盛り風流で美麗で僻地の旅亭とハ甚た異り然れども別段宿料の不廉と云ハもあらさ大凡貳十五六錢より三拾錢迄に止り猶又膳部の円噂客扱の事ハ追々云べし是ハ獨大礒

に限らず尾州名古屋邊迄ハ皆斯の如し名古屋以西ハ上方風にて甚だ粗略也さて彌十
礒郎ハ湯より入り舞座に着と晩飯の膳を運び來る膳ハ黒塗の中足膳部ハ菓子碗向詰坪
に汁薄板に奈良漬引ものハ盃鍋烹の加減ハ好美にして盛方も多からず少からず亭に
寄てハ酒一個を添るも有彌十礒郎驚入て滿腹す亭主出で來り　亭主　誠にお粗末で
ございますよろしく召あがつてくださいませ　彌十礒郎　口を揃へて大きに御馳走
彌十　時より御主人當驛に鍋屋のお汁と云宅が有やすかね　亭主　ハイ狹い處でハござ
いますが鍋屋のお汁と申てハ粒立た者にハ有ますめエ左すれバ番地が知て有ますれ
ばそれに依て尋たら知やーやう　彌十　五十三番地で有やす　主人　それぢやア西端の
裏屋でござりまーやう御用ならお士お遣なーやうかヲ　彌十　何わつち等が出かけな
くちやア用が足ないのさ飯もくつたし一寸いてきやしやう手廻を頼みます　亭主　畏

まりまーた御緩となさいませいコレお竹ヨお靴を出ておきなと云つゝ立て行彌
十礒郎ハ髪など撫付帶を結び直し男振を作り彼預物を携へ宮代屋を出で町端より至
り五十三番地に付て漸く鍋屋の宅を尋當り其休裁を見れバ裏家の片隅より一間半間
口の眼もあてられぬ荒家也外からハイ御免なせいと云て小戸を明兩人這込かすかな
る破燈行の火影ですかし見バ年齢三十五六位にて縮髪をかき乱し馬面の如き顔に黑
あゝた滿齒糞積て黑白を別たず怪敷休の女と今獨ハ年齢三十斗りに見て髪ハ赤く
秋の野山より似て薄く山骨顯れ顔ハ圓く恰も鍋蓋の如く鼻ハ平底口ハ鰐の如し然も
出齒の女なりいつれも身につゞれをまとひ亂征伐の休とみへたり　彌十　僕等ハ東京者
で有やすが鍋屋のお汁さんハ御宅でございやすかね　女　ハイ私が其お汁でございます
彌十　左樣かヲそれぢやアお前の妹さんがお在かヲ　汁　妹ハ二個有やすよ直の妹ハこれ

でございますの薄髪圓顔其次ハ濱ヨ居まして益ヨハ居あいのでございますヨ貴客ハどんな譯で此醜体極を御尋下さるのでございますヱ彌十礒郎按に相違して臍を潰し明た口もふさぎ得ず惘然切て言葉もなかりしが今更止譯にも至らず横濱の妹の傳言を述べ委托たる遺骨の包を渡せバ汁傳言を聞合點の行ぬ顔付まて品を請取包を開き困の蓋を取ばこれ如何ヨ水藥の入たる瓶有其総廻を粉藥の包にて詰とし有る汁暫く考へやうやく悟し趣きまて　汁　コレハコレハお序とハ申ながら荷嵩な物を無お邪魔でございましたろう誠ヨ御無禮樣でございました有がたうぞんじますこんなきたない宅でございますが先ヽこつちへ入しやいとヤッチの五六本殘て有を出して烟草を進む彌十礒郎ハ遺骨の瓶と化たるをみて二度愕然　礒郎　横濱の玉藻前が骨だと云たが今見て愕然ぢ然し按てみれバお母を火葬時五體から出た油を取て瓶に入たので骨

ハやげんで以て粉したんであろふ　汁　何さうトやアございません濱の妹の愛夫が車曳で爰に居ますが子瘡毒を煩て稼が出らないので居食だからお醫者にかゝることも叶ハなひ處から濱の妹へことづけをしたと云て居ましたそこで瘡の藥を妹か贈たんでございますのヨ私なんぞたア違つて濱の妹ハ狡猾ございますもかち口前ハ何か云ましやうヨ彌十礒郎聞バ聞程惘然果さりとても馬鹿氣切て苦情も云れず失望ながら早々此宅を遁げ歸る途中にて　礒郎　彌十さんどうだ奇妙ぢやアねエか　彌十　礒郎がふざけを聞て腹を立て置アあがれ面白もねエ　礒郎　そんなに憤怒た處が身から出た鎖びだ仕方がねエ正か裁判所へ告訴とも出らりやアしめエし諦を付るのヨ彌十も思ひかへしてみると笑くなり取敢ず

樂みし花ハ茨と替りけり骨ハとろけて水ときへつゝ

果ハ大笑ひとなり宮代屋をさして歸る　亭主　知やしたかね彌十ハイ漸く尋ねやした
途中でとんだ厄介を頼まれ　據なくあんな宅へ行やした　亭主　さうでエすかねと云
つゝ下女を呼もとの坐敷へ二個を供なハせ火鉢の火鋏瓶の白湯を加す　下女　お床を
取ましやう　礒郎　床を取れちや大變だ　下女　それぢやアお床を敷ましやう　礒郎は
やくともさうして寢語としやうか姉さん僕の處へ來ると來ちやアくれねエか　下女ヲ
ホゝゝと笑て　答へず床を敷仕舞御ゆるりッとおよんなさいと云て行兩個ハ夜具を
見るに何も更綿にして唐ざらさ也夜着の襟ハ洋びろうどを掛て有　宿の番頭　次の間
からハイ御免なさい嘸御草臥でございましやう登名帖ハお記を願ひよ出ましてござ
いますかね　彌十　左樣さ前時田掛よ記して置やした　番頭　ハイ〳〵有がとう私ハ唯
今外から歸た處で帖簿をまだ見ませんゲ貴名ハどちら樣で入しやいます　彌十　私等

東京の神田さ　番頭　東京の此節の景況は如何でございい升ヲ　彌十　さうさまづ官
省の處も居合で官員の位置も勤ず諸營業も進で行方だし諸物價ハ中等でまづ居忠唯
官權と民權との鬪爭まついて書過の新聞屋が罰金を頂戴する位の事さ　番頭　それぢ
やア何も同ト秋のゆふ暮でございい升ヲ　彌十　時よ申上ますが手前事ハ一新講の義でござ
いますれバ貴客方の方に御不都合の義は毫もございません譯でございますが外から
へいる奴ハ油斷が出來ません殊に東海道と云大往來の義でございますれバ御心得ま
でよ申上ます就まして御所有のれ大切の品ハた預り致しましてよろしうございます
れバ証券と引換よ明朝迄御預り致しましやう然し斯申ましても必ず夜分が怪異だと
申すでもございいませず寢ずの番も居ますする譯なれバ御預の品も御適宜に過ませんれ
預り申ても別よ手數料を請願す譯でもございいませず講宿の義でございいませず故唯々御

客様大事よ自然御忘れもの等ハ嚴重よ御國元の御舘へ遞送仕ます仲間の規則でございます　彌十　イヤハヤ御叮嚀のことさ僕等ア別よ大そふなものも持ないから御預けをするにも及バないよ　番頭　左様なら御ゆるりつと御熟睡なさいませい深更でも御用がございますれバ起番へ命令てくださいませいと云て行引遂へに小兒油徳利の函よ入て手の附たるを提來り油をまん〳〵と加で回る彌十礒郎ハへんな所よ慢氣を生ト　彌十　礒公よ當家に僕輩を斯叮嚀よ扱ハ東京と云大都會もの其上僕が人品の好い處に感トて尊敬のであろう足下野卑な晒落をしちやァいかないせ　礒郎　彌十さんて　いげいよ慢氣るが好せ僕等の人品と鎮着で他人が見上てくれるのさ　彌十　西アあが　れ藤澤の車夫よさへ輕蔑るくせに　兩個の爭ハさて詈斯の如き扱ひ振ハ宮代屋の　小異よて凡み　みにあらず上ふもいへる通東海道の講宿ハ大同　な此体なり　彌十　何ハ兎もあれ叮嚀ぢやァねエか　礒郎　さうさ田舍ハすべての事

が馬鹿に叮嚀過らア　彌十　又惡口を云せ田舍か云て何處か云て好こたア好よ東京で此格に爲たら大當せそれハさうと此大礒ハむかし虎御前といふ大當ものゝれいらんゞ居處だ一詠やらかそふか彌十

川竹に身をきつめてもうきふしを守て清き名ハ殘げり

礒郎　斯寢から女の咄を出れちやァ困るネ　僕も一詠と出やうか礒郎

備士の炊く火にしあられと日ハ紛れ夜ハかに斯物思哉

隣坐敷の客とれをきゝて　客　伏ながら御免なせい前時から承りますれば先生ハ東京で入しやるさふでございまをが何地へ入ーやるね　彌十　何當といふ譯ア有ません　がまづ大坂に出かけそれから摸樣よ依て西遊と云積でおさいやす貴方ハ何國かね　客　ハイ私ハ浪花でございます濱よ用向が有て來した評判よも少〳〵用事が有のでかへり

ハ陸と致しまーた明日ハお供を願ひまを承れバ先生ハ御風流でござい升チェそれで大坂から西國といふ思召も御用でハなく一入の御樂でお浦山しうございまを私なんぞア商法で世を渡る譯だから一分間も遊ぶ譯よやアさいりやせん此休よ道中をーて居間が樂でございます活斗ュ苦しみながら風流ハ隨分好きでございまをしかし無學で何も知ないので御話ハ勿論盲目の垣覗でございます先生ハ歌道ハよかど御贈誄でございますチェ　礒郎　何さうでも有ませんが僕ハ馬鹿麻呂あの男ハ滑稽といつて歌道ュ於てハ東京ぢやア三四翟の顔で有やを　客　東京でその位お御顔あらまつ此道中で名古屋これハ和歌に限らを諸藝の關所といふ所でございますから名古屋でしハちく御滯留伊勢路も隨分和歌ハ流行でございますし夫から西京ハ申ュ及バず涙花も可なり流行で大家も有ますから靜岡で一度ハお別を致しますが大坂へお出浮のせつハ

京町橋筋平野町四丁目二番地何尾勇三と御尋下さいませい有名家へ御招介を致しやしやう　礒郎　それア添ふでございやすが有名家ハ互に天狗で人の歌ハ信用仕ないので却て面白ねェから雷鳴家ハ訪ねない積さ　勇三　成程其氣味ハ何藝でも大有でございますそれぢやア奇妙なことが有ますを私ハ船具商でございやすからその道で大工に懇意が澤山有ますがチ大坂の江子嶋ハ船大工の巣で天滿の天神樣の氏子で昔から神輿ハ船大工の寄附で祭典といふと神輿ハ船大工仲間の引受でイヤハヤ荒ぷい手合だからあらぱい業バかり弊習でございましたが當時ハ文明開化の世となり堂島雜子場其外の館車手合まで皆一變して上品めかし發向傘付といふ樣なものを奉納しますュ船大工手合斗り從前の通で他の誹謗を請て居を聞てくやしがつて發句や傘付を飛拔和歌ハ花かといふ處ュ出やうと云ので仲間の連中が私へ妙先生ハ有めェかと依賴

で居ますのさ六月の祭典までハ間も在ることなり少〻御逗留を願ひ三四十日夜〻稽古を致しましたら腰折の眞似位ハ出來ようぢやァございませんか御教示を成つてくださいます譯よやァいきやすまいかあんな手合の事だから謝義ハ澤山でございます　彌十　盲目蛇に畏ずで慾を萌し成程それァ妙な馬鹿驢呂うしどうだヱ　磯郎　急がない旅だから浪花へ出た上で兎も角もしやうぢやァねェか　勇三　それぢやァまづそのぶんに極てくださいませい委しい話ハ大坂で再會のときと致しまして馬鹿驢呂で思ひ出しやしたが今日藤澤の棒鼻で車夫と諍論をして入しつたのハ先生でございやしたヱ　磯郎　れ前エ見なさつたか　勇三　御手際ハ拜見いたしやした馬鹿といつたのが起でございましたヱ車夫ハ神通を得たとでも云樣な奴でございやすねエ　磯郎　なぜ　勇三　先生の尊号が馬鹿驢呂と被仰のを知て居たと見へます唯呼流しよしたの

が失敬のて馬鹿驢呂樣とか馬鹿先生とか云へバ譯ァなかつたのでございましたろう　磯郎　まァそんなものさ　勇三　何してもあんな手合の應接ハ先生なんどァ不向でございますよ車賃も所々よて相場がございまして東京から箱根迄ハ凡一里五錢位の平均で函根から先ハ不離でございまして一里が八九錢十錢位でございますそこを上手に廻て八錢均位に乘うと云處でございます明日からァ靜岡までハ私が引受て車の極引ハ致しやしやう　勇三如何なる譯にてか〻ることを云か函根の前後に　彌十　お前エハ中〻苦勞人だ能万事に行渡つて居なさる感心だ靜岡までの處ハ依頼やしやう我輩の爲よハ宜稽古だ時に夜も更て來た朝ねむくつて困るから最眠やしやう　勇三　それがようございますと話も止互よ夜着ひきかぶり夜も又旅のゆめ路をたどりける大磯出立のわ話ハ編を換て御覽に入ます然し贅澤ならざる彌十磯郎の義でございすれバ看

客が假名違部言話へ聞たくない止と被命ば是非もなし大磯までの道中にて止るのみ
自然看客の愛顧にて先行をしろ被命ば明三日へ早朝より大磯を出立致します畢竟彌
十磯郎勇三三個の道行話のいかゞへ二編にて御見かへりを乞ふ

三代目膝栗毛卷之一 終

明治十六年六月十二日御届　（定價六錢）
同　年同月十五日刊行

編輯人　東京府平民　村上孝四郎　芝區日影町一丁目一番地

出版人　廣島縣平民　桑原八郎次　京橋區加賀町十二番地

發兌元　東京京橋區加賀町十二番地　由己社

本社出版書目

○智慧の庫　毎月發兌定價二錢五厘　一ヶ年前金二十六錢
○八間須知百事問答　毎月發兌定價八錢一ヶ年前金郵税共八十八錢
○智慧の庫合本　自壹號至八十號全八冊　壹冊ニ付定價廿五錢宛
○智慧の庫附錄合本　定價廿五錢
○智慧の庫虫干　同十五錢宛
○古今詩文軌範合本　同三十錢
○夫婦寢物語　同十錢
○東京政談合本　同七十錢
○女房の不經濟　同十五錢
○危世者色與酒　同十八錢
○小學女子諸禮手ほどき　同十錢
○金のなる木　同九錢
○子育の草紙　同十五錢
○郵便規則改正　郵便條例一覽　同六錢
○東京娘風俗　同十五錢宛
○商法融通論　同十錢
○男女交合得失問答　一冊代　同八錢
○北里花魁列傳　同二十錢宛
○西洋天一坊第一二　同十六錢宛
○撰新枕草紙　同二十五錢
○奇聞國烈女の疑獄　同二十錢
○通俗水滸後傳　同廿錢
○自公楠筆旗章寫眞石版　唐紙半折　同廿錢
○幾何本原合本　同一圓五錢
○思ひきや浮世の間違　同十錢
○とつ卯ミやげ兩國橋奇聞　同十錢
○男女衛生新說第二　同六錢宛
○明治八笑人　同十二錢

○東京大賣捌所

神田雉子町　巖々堂
平松町　大津屋　善兵衛
琴平町　靜　霞　堂
元大坂町　法木　德兵衛
本石町二丁目　小宮山　昇平
室町三丁目　秋山　武右衛門
麹町五丁目　篠崎　定雄
馬喰町三丁目　井上　茂兵衛
本郷春木町　解　明　堂
牛込看町　深野　彌兵衛
馬喰町二丁目　伊勢屋　新太郎
通二丁目　深瀨　龜次郎
通四丁目　內藤　加宇
大傳馬町二丁目　三宅　半四郎
長谷川町　福田　熊次郎
米澤町　深川屋　長助
牛込神樂町　積　善　舍
四ッ谷傳馬町　加藤　久兵衛
銀座二丁目　開　新　社
小川町　秩　山　堂

○諸國大賣捌所

筑前博多中嶋　藤井　孫次郎
尾州名古屋　石　版　舍
仙臺大町四丁目　木村　文助
廣嶋大手町　早　速　社
陸奥國青森大町　丹　心　堂
三重縣津京口町　小林　鉀三郎
青森縣津輕町　正　友　堂
三州豊橋　高須　又八
横濱ステーション　鈴木　陌三郎
横濱太田町　平野　傳吉